

## 韓国における朝鮮人特攻隊員像の変容

権 学俊<sup>i</sup>

戦時中、「半島神鷲」として祭り上げられ、「軍神」として讃えられた朝鮮人特攻隊員は、植民地解放を契機に一転「歴史の汚点」と見なされ、政治的に不都合な存在として記憶から抹消された。その後韓国における映画『ホタル』の公開や、「帰郷記念碑」問題等で表面化する事はあっても、社会が内包する特攻戦死者に関する否定的な評価に大きな変化は見られず、今日までその「封印」が完全に解かれる事は無いままである。しかし、2000年代に入ると民主化の進展・多様で積極的な過去清算のあり方等で、世論にわずかながら変化も見受けられる。当問題を扱う研究やドキュメンタリーの内容を見ても、朝鮮人特攻隊員の歴史的な位置付けを総合的に判断し、客観的に捉え直す動きは確実に見られるのである。現代の韓国社会で生まれつつあるこうした流れを、今を生きる若者がいかにして受容し、議論していくかという点も、今後「朝鮮人特攻隊員」という事実を国全体が受け入れ、彼らの存在が正当に認められる社会の構築に向けて、非常に大きな分岐点となるであろう。

キーワード：朝鮮人特攻隊員、韓国社会、忘却、映画『ホタル』、卓庚鉉、帰郷祈念碑

### はじめに

20世紀初頭の日本による朝鮮の植民地支配は、多岐に渡る研究によってその支配政策の様々な側面が明らかになりつつある。しかし、こと「朝鮮人特攻隊員」という存在が日本と韓国において戦前から現在までどのようなイメージ変容を遂げ、両国社会に受容されていったのか。そのプロセスや社会的力学について、歴史社会学的な検証が進んでいるとは言えない。

近年日本では、朝鮮人特攻隊員を扱った作品や映画がヒットしている。特に、鹿児島県知覧特攻基地から出撃する前の最後の夜に富屋食堂を訪れ、朝鮮半島に伝わる民謡「アリラン」を歌ったとされている朝鮮人特攻隊員・卓庚鉉（日本名・光山文博。以

下、卓庚鉉）をモデルとする高倉健主演の映画『ホタル』（2001年）と、東京都知事であった石原慎太郎制作の『俺は、君のためにこそ死ににいく』（2007年）は、社会的に大きな話題をさらった。これらの映画における朝鮮人特攻隊員は、支配国に従わざるを得ない朝鮮人という宿命や、特攻作戦の悲哀性が引き出され、典型的な「感動」のイメージばかりが強調された。

一方で、韓国における朝鮮人特攻隊員の存在に関する社会的関心は決して高くない。最近になって少しずつ明らかになっている朝鮮人B・C級戦犯、シベリア抑留者問題等とは異なり、日本の特攻隊に編成され戦死した人々の中に朝鮮人が含まれるという事実は、長らく韓国社会においては忘れた主題であった。それどころか、朝鮮総督府の宣伝物として利用され日本のために「皇国軍人」として戦ったことが、韓国では「反民族行為」だとすら思われ、植民地解放後の韓国社会において、彼らとその遺族の地

i 立命館大学産業社会学部教授

位は、「半島の英雄」を育てた愛国者から、「親日派」の烙印を押され同胞を裏切った「売国奴」として憎悪の対象となったまま、事実上、政治的に不都合な存在として「公的な歴史」の空間や周囲の記憶から意図的に抹消されていたのである。こうした状況に一石が投じられたのもまた、上述の映画『ホタル』の公開が大きく関与している。

本稿では、いかなる社会的背景のもとで朝鮮人特攻隊員が成立・誕生したのか。韓国社会は卓庚鉉を中心とする朝鮮人特攻隊員の存在をいつ頃から認知し、その記憶をどう扱ってきたのか。さらに彼らに対する歴史的評価は戦前から植民地解放後、現在までどのように変容していったのかを明らかにする。そして、「親日」という二文字に自ら縛られ続けた韓国社会が孕む課題を、この問題の背景を通じて考察していきたい。

## 1. 朝鮮人特攻隊員という「戦跡」の誕生と「半島の神鷲」

### 1-1. 朝鮮人の戦争投入と朝鮮人操縦士の養成

日本は帝国主義の国々の中で、植民地の現地住民で構成された部隊の養成と将兵の採用をしない唯一の国家であった。1926年、日本陸軍は兵役法の審議にあたって、朝鮮駐屯軍における朝鮮人歩兵部隊の創設と戦闘訓練の要請に対して、植民地の兵役法の適用は時期尚早だとし要請を拒否した。理由としては、植民地人の「参政権」ないし「自治権」に繋がる恐れがある点や、日本人と比べて国家・天皇に対する忠誠心の差や、戦闘組織の構成員として劣るとする点などが挙げられた。

しかし、全面的に日中戦争が勃発した1937年以降、日本帝国の総人口の30%を占める朝鮮人・台湾人を対象とした植民地政策は、土地調査と米穀供出を中心とした経済収奪から、労働者の強制連行や軍人軍属、軍隊慰安婦への動員などの人力収奪へ発展する。それまで差別の対象であった朝鮮人が一転「皇国臣民」として、戦争に勝つための核になったのであ

る<sup>1)</sup>。真珠湾攻撃でアメリカがアジア太平洋戦争に介入する翌年まで、表向きは一般の朝鮮人を対象とした兵役義務は課されていなかったが、実際の所、その前段階として日中戦争の勃発とともに兵力確保のための陸軍特別志願兵制度、海軍特別志願兵制度などが導入され、「志願」という形で朝鮮人を戦争に投入していたのである。当然そこには権力者側からの半強制による「志願」も数多く見受けられた。

戦火が拡大しこうした軍事動員が進められる中で、熟練した「航空」人力の確保は至急の問題であり、優秀な操縦士の養成は戦争の勝敗をも左右する重大な課題であった。朝鮮総督府は現地の青少年達の「空に対する憧れ」を積極的に扇動し、操縦士不足という緊急の問題に対し朝鮮人が操縦士に志願できる制度を整備する。1943年には「青少年航空訓練実施要項」を発表し青少年の航空訓練を積極的に強化・実施するとともに、陸軍少年飛行兵制度、航空機乗務員養成所、陸軍特別操縦見習士官、特別幹部候補生制度の導入を通して、朝鮮の若者を積極的に戦争に動員した<sup>2)</sup>。

特に「陸軍特別操縦見習士官」は、身体が丈夫かつ改めて基礎軍事訓練をさせる必要の無い高学歴者に、1年半程度操縦技術の教育と徹底した思想統制を行い、戦場に送り出す一種の「操縦士即席養成プログラム」であった。1期生に77名が合格したが、その内朝鮮で大学に通った日本人が70名で、朝鮮人はわずか7名であった。この制度に志願できる大学・専門学校の数学生数は、当時朝鮮全体の人口2600万人の内僅か数万人であり、彼らは朝鮮内でも最上層のエリート達であった<sup>3)</sup>。

### 1-2. 創られる「半島の神鷲」

特攻作戦には「震洋」などのモーターボートや、一人乗りの改造魚雷「回天」による体当たり攻撃など多様な形態があったが、最も大規模なのが爆弾を抱えた航空機による敵戦艦などへの体当たり攻撃、いわゆる「航空特攻」であった。1944年10月に海軍がフィリピン戦線で戦果を挙げて以降、陸海軍共に

次々と特攻作戦を採用し、1945年3月に始まる沖縄戦では特攻が航空部隊の主要な戦法となった。特攻隊の全戦死者は陸海軍合計で4,160名に上り、中でも少年兵、すなわち陸軍の少年飛行兵、海軍の飛行予科練習生出身者がかなりの割合を占めていた<sup>4)</sup>。国内では太刀洗（陸軍）知覧（陸軍）万世（陸軍）鹿屋（海軍）都城西・東（陸軍）など九州各地、そして当時日本が統治していた台湾などの基地から出撃しているが、知覧基地は本土最南端だったということもあり、陸軍の特攻出撃者の中で最も犠牲者が多かった。特攻作戦が開始されると日本の新聞は大々的にこれを伝え、「科学を超越した必死必中のわが戦法はわが尊厳なる国体に出づる崇高なる戦ひの妙義」<sup>5)</sup>「日本固有の精神を具現化した特攻」「圧倒的な物量を有する米を打ち破る希望を大いに高めた作戦」<sup>6)</sup>と、物量では劣っても、日本人の精神力を発揮すれば必ず勝ると扇動したのである。

現在、特攻の犠牲者であると確認された朝鮮人18名はすべて陸軍所属であるが、彼らの「特攻死」は、戦時動員のための絶好の宣伝道具にされた。その名前は朝鮮の新聞を通じて大々的に報道され、戦争英雄「軍神」として仰がれたのである。

1944年11月29日、靖国隊の一員としてレイテ湾海戦に出撃し戦死した当時20歳の印在雄（日本名・松井秀雄、以下、印在雄）が、その最初の「軍神」である。出撃からおおよそ3日後、『毎日新報』は印在雄の特攻死を特筆大書し、以降も同紙は彼の記事が続けざまに掲載した<sup>7)</sup>。紙面は3週間にわたって印在雄の哀悼と追悼・追慕、そして「松井伍長の後を従う」という各界各層の声明などに関する記事で溢れ、飛行服を着ている隊員の姿、息子の死と周辺の歓呼の中で右往左往（当惑する）する親類の姿など、特攻作戦が事実上終結した1945年7月まで、印在雄は他の特攻隊員に比べても特別な存在として扱われた。また、朝鮮の日本語新聞『京城新聞』にも、「半島の神鷲松井伍長命中」「尽忠の至誠立証」「期待を裏切らず」という見出しで一面を飾るなど<sup>8)</sup>、彼の死は朝鮮内各紙で数多くの報道がなされたのである。

朝鮮総督府は文人、知識人、芸術人（映画関係者等）、青少年、小学生などを総動員して印在雄を英雄化する作業を行ったが、その代表的な例が、詩人・徐廷柱が発表した「松井伍長頌歌」であろう<sup>9)</sup>。さらに、彼の人物像を紹介する「ヒューマンストーリー」「純忠 人生二十の松井伍長の一代記」が掲載される等、印在雄は「半島の神鷲」として崇められ、「内鮮一体の精華」として讃えられ持続的に報道されたのである<sup>10)</sup>。

そして、印在雄の家には、朝鮮総督府総督、阿部信行陸軍大将夫人・光子が直々に弔問に訪れたのである。阿部の息子である阿部信弘中尉は1944年、イギリス軍航空母艦に特攻して亡くなっていたのだが、こうした同じ悼みを持つ親たちを対面させ、宣伝の効果を極大化する狙いがあったのである。その後、印在雄の遺族達は、大々的にスポットライトを当てられ、「軍神・松井伍長」の遺族として模範的な生き方を強要された<sup>11)</sup>。半島が生んだ誇らしい「神鷲」の遺族達は、本格的に朝鮮総督府の宣伝物として利用され始め、ラジオ番組の出演を命じられ特攻隊員の遺族による「決意」が放送された。

日本にとって朝鮮人特攻隊員の戦死は、とても興味深い宣伝道具であった。彼らの名前をつけた飛行機が献納され、彼らの死を讃える碑が出身校の校庭に建てられるなど、朝鮮人特攻隊員の「死」は、朝鮮人を戦争に積極的に動員する手段として利用され社会的な注目を集めたのである。こうした背景には、軍隊内の不安な状況が見え隠れしていた。当局は、志願兵制度やその後の徴兵制によって動員した朝鮮人について民族解放を訴え、逃亡や「軍紀事件」を蜂起する温床とみなしていたのである。こうした状況を打開すべく、より一層「半島の神鷲」を喧伝する必要に駆られていたのである<sup>12)</sup>。

## 2. 韓国社会における独立運動の記憶と朝鮮人特攻隊員の「忘却」

### 2-1. 国家アイデンティティの樹立と反日主義の利用

朝鮮人特攻隊員の「軍神」という言葉は、敗戦と共に幻のごとく消えていった。特攻隊員の家族達も解放には大喜びであったが、一方で別の試練の始まりでもあった。朝鮮戦争による多数の「韓国のために戦った死者」の影響や、これまで「英雄」と特別視していた反動により、日本が絡む戦争で家族を失った遺族は冷遇された。それだけに、朝鮮人特攻隊員への思いは重苦しい。

韓国政府は建国過程における政権の創出と国民統合の正当性を確保するために、植民地経験を積極的に活用した。解放後、臨時政府をはじめとする海外で独立運動を行った人々に対する記念行為も重要な政治的意味を持っており、朝鮮独立を志向した民族主義的な思想や運動が政治的な正当性を付与したのは自然な過程であった。そして植民地時代の反日闘争・独立運動が韓国社会の戦時中の公式的な記憶として定着し、韓国の歴史が「再生産」されたため、朝鮮人特攻隊員の存在は公的な歴史から意図的に抹消され、追放されたのである。特に初代大統領の李承晩や軍事政権時代の朴正熙などは、国家アイデンティティの樹立のために反共・反日主義のイデオロギーを徹底的に利用した。このイデオロギーが韓国社会の支配的な役割を果たしたのは間違いない。

韓国政府がまず手始めに取り組んだのが植民地支配に関する「国家記念日」の制定であった。特に1919年に発生した3・1独立運動を記念する「三一節」は、国家への帰属感とアイデンティティを覚醒させ、国民統合の媒介として機能しただけでなく、戦後韓国人が共有できる最良の歴史的経験として、記念行事は左派右派を問わず盛大に行われた。太平洋戦争の終結を意味する8月15日は、植民地からの解放記念日「光復節」と制定した。光復節は以後、

歴史教科書問題や領土問題、従軍慰安婦問題、靖国神社参拝問題等の日韓関係における諸問題に対する提言を日本へ向けて発信する役割を果たしている<sup>13)</sup>。

特に、軍事革命で政権を掌握した朴正熙は、政治的な正当性の補強のため戦争と植民地に対する記憶を積極的に利用した。そのため、主体的韓国史観の定立、有形・無形文化財の発掘、復元及び再建築、日本と関連のある国難を克服した「民族的な英雄」たちの神格化等の政策を推進するとともに、関連施設の整備を通して民族主義の強調に特に力を入れていた。1592年豊臣秀吉による「文祿の役」と「慶長の役」で功績を上げた李舜臣や、1919年の全国的独立万歳運動を主導した柳寛順を記念する銅像や記念館が全国の学校・公園等に建てられた。韓国の小学生が必ず一度は訪れる、李舜臣の祠堂顕忠祠の総合浄化や、抗日独立運動関連の義士の祠堂建立、関連遺跡の整備・聖域化が積極的に行われたのもこの時期である。これらの整備事業には、中央政府のみならず、地方自治体、民間団体、学校等が積極的に関わった。2013年時点で韓国内823ヶ所、海外788ヶ所にも及ぶ<sup>14)</sup>、こうした記念施設・慰霊碑・銅像等の建設数の推移をみると、大韓民国の樹立直後と朴正熙政権期、そして歴史教科書問題があった1980年代以降に建設数が大幅に増加した事が判る。韓国では、長年に渡り歴史教科書は国定の一種に限られていたが、その内容は植民地時代の抑圧・動員被害や数多くの反日闘争・独立運動に関連する記述が多くを占め、民族主義・反日等、政治的意図が反映された代物であった<sup>15)</sup>。

### 2-2. 反日闘争・独立運動の記憶生産と民族の「恥部」

国家主義的な記憶の再現のため、植民地関連の数多くの記念館が整備された。その代表的な記念館が、1982年の日本の歴史教科書問題をきっかけとして、120万坪の敷地に7個所の展示館と14の象徴造形物を整備し、1987年に完成した「独立記念館」である。

記念館は3・1運動、臨時政府、軍慰安婦問題と強制徴用問題、そして反日闘争・独立運動等に関する展示があり、朝鮮が日本の侵略を受けながらも常に民族をあげて戦ってきた歴史を強調している。

そして、ソウルにある西大門独立公園内に位置している「西大門刑務所歴史館」も植民地時代の記憶を再生産する代表的な歴史館である。1998年、反日闘争・独立運動に関わった多くの朝鮮人が拷問・処刑されたソウルの元京城監獄跡地に造られた同館は、刑務所という空間が持つ特殊性の中で監獄での拷問と処刑の執行過程を体験できるように展示され、反日感情に基づく敵対パターンを生産しているのである<sup>16)</sup>。公園内には殉国烈士追悼塔、3・1独立宣言記念塔、史跡32号の独立門、そして殉国烈士の位牌が奉安されている独立館があり、独立運動の記憶の場所として位置づけられている。

さらに、元従軍慰安婦の方々が共同生活する「ナヌの家」内にある「日本軍慰安婦歴史館」は、世界初の「性奴隷」をテーマにして建てられた人権博物館である。元日本軍慰安婦である金学順の証言を契機とし、元慰安婦の保護施設として始まった同施設は、他の記念館や博物館と違う特徴を持っている。また、韓国挺身隊協議会が運営している「戦争と女性の人権博物館」も普遍的な戦争被害の女性問題を扱う場所となっている。

だが、日本の軍人として戦争に参加した朝鮮人を悼む関連記念施設は整備されなかった。彼らは決して植民地時代の「犠牲者・被害者」として認められなかった。祖国解放をもたらした戦争で「皇国軍人」として戦ったことが、韓国では「反民族行為」だとすら考えられるようになったからである。その理由としては、第一は、戦場が朝鮮半島ではなかった点である。第二は、一つの政治主体として敵国と戦争を行ったわけではなく、植民地としての間接的な経験だった点、第三は、戦争の勝利による独立ではなく、日本の敗戦の副産物として独立が与えられたため、記憶よりも忘却を選択した点が挙げられる。すなわち、自主的な独立戦争によって獲得した独立

ではなく、連合国の勝利による植民地からの解放というのが実情であったのである。勿論、独立闘争と青山里戦闘などを数多くの反日戦闘があったことを看過する訳ではない。しかし、それは解放と独立を獲得することにおいて決定的な役割を果たしていたとは言い切れない。

特に解放後、「朝鮮人特攻隊員」という記憶は隠したい民族の「恥部」として、または告発し糾弾すべき民族の「裏切り者」として位置付けられ、韓国社会から忘却されたのである。彼らへの否定的なイメージは「神風」という言葉から感じられる狂信的な天皇崇拜者集団という偏見や、「徴集」ではなく「志願」による特攻という表面的な事実によりさらに増大された。

そしてこのような意識が作られた理由は、朝鮮人特攻隊員の場合、当事者達が殆ど戦死し、その実態と真相が明らかになってなかった点、飛行機操縦という業務の特性上人数もごく少数だった点、さらに遺族も日本のために自殺攻撃を行った「親日派の家族」という烙印が怖くて詳細を明かせなかった点もある。しかし、韓国第13代韓国空軍参謀総長に就任する周永福のように、特攻隊員として生き残り、解放後、韓国空軍の設立・発展に大きな貢献をした人々にとっては帝国日本の軍人として戦争に参加したこと自体が何よりも不都合な真実であった点は見逃せない。

### 3. 日韓社会における朝鮮人特攻隊員関連の報道と研究

#### 3-1. 日本における朝鮮人特攻隊員の関連研究

朝鮮人特攻隊員の存在は、韓国よりも先に日本社会において、1980年代頃から徐々に注目を集めるようになる。

1985年に発表された『開聞岳―爆音とアリランの歌が消えてゆく』は、朝鮮人特攻隊員に関する最初の本格的分析であり、筆者の飯尾が陸軍士官学校の出身で父親も韓国系という事もあり、沖縄で戦死し

た朝鮮人特攻隊員・崔貞根（日本名・高山昇）を中心に当時の隊員の苦悩と葛藤が深く描かれている力作である<sup>17)</sup>。さらに、1985年には鹿児島県の南日本放送局が製作したドキュメンタリー「11人の墓標」が県内で大変な話題となり高い評価を得た<sup>18)</sup>。この番組は知覧特攻平和会館に祀られている11人の朝鮮人特攻隊員がなぜ日本の特攻隊に入り、戦死していかねばならなかったのかを、戦後初めて知覧の慰霊祭に参列した1人の韓国人遺族を通して探っていく内容であった。さらに、1988年には桐原久の『特攻に散った朝鮮人—結城陸軍大尉「遺書の謎」』が出版されるが、1990年代に入ると作品発表が突如としてぱったり止んでしまう。

しかし、2001年に映画『ホタル』が公開され、話題になると、この作品の刺激を受けて国内の放送各局でドキュメンタリーが制作・放送され、数々の研究が発表されるなど、朝鮮人特攻隊員問題が再び脚光を浴びる。『ホタル』は、「トメの伝説」「アリラン特攻」が鹿児島を超え、全国へと広がる決定的な役割を果たした作品でもあり、2001年以降の、知覧の特攻基地、特攻隊員に関するドキュメンタリーやノンフィクション書籍等の流行も、当然この映画と無関係ではない。

他にも日本で最初に朝鮮人特攻隊員・卓庚鉉を活字にした戦記作家・高木俊朗の『遺族』（1957年）、『知覧』（1965年）があり、赤羽礼子・石井宏の『ホタル帰る』や豊田穰の『日本交響楽・完結編』（1984年）内でもアリランを歌う朝鮮人特攻隊員のエピソードが簡単に紹介されている。しかし、日本社会における卓庚鉉をはじめとする朝鮮人特攻隊員の分析は、卓庚鉉の「アリラン特攻」に代表されるように感傷至上主義が根強く、日本の植民地支配・戦争責任とは切り離された次元で扱われている傾向にある。彼らを植民地支配、戦争被害の脈絡の中で捉えることなく、朝鮮人特攻隊員に対しては朝鮮人であることの宿命性や、明日死ななければならない悲劇性を引き出し、涙を誘発する仕掛けとして利用していると言わざるを得ない。

こうした中で韓国人研究者・裴始美と日本人研究者・野木香里は、これまで史料調査が満足に行われていなかった点を踏まえ、徹底したインタビュー調査と資料分析に基づき、彼らが存在した歴史的背景や特攻志願の過程について、史実とされている事柄を改めて問い直し、戦死した17名を客観的に概括するという、朝鮮人特攻隊員に関する研究を深化させる上で、非常に価値の高い研究を行った<sup>19)</sup>。

朝鮮人特攻隊員の存在は、戦死の当時「皇軍の旗鑑」として称賛していた日本政府でも、韓国政府でもなく、生き残った所属部隊の戦友や学校の同窓生、マスコミや研究者等の個別の縁や関心によって再び歴史の舞台へと登場する事が可能となったのである。

### 3-2. 解放後の朝鮮人特攻隊員に関する韓国人の記憶

上述したごとく、植民地解放以降の韓国社会における彼らの存在は、親日附逆者の代表としてタブー視され、徐々に韓国人の記憶の中から消し去られていった。戦前軍神であり「朝鮮の誇り」として称賛される存在であったにも関わらず、その逆転は劇的ではある。韓国におけるマスコミの報道と研究の流れを把握すると、いかに韓国社会が彼らの存在について沈黙し続けてきたのかを痛切に感じる。

解放後の韓国社会における朝鮮人特攻隊員に関する報道は解放後の1946年から始まる。朝鮮人として初めて特攻死した印在雄が、実は生きており仁川に入港するという内容であった<sup>20)</sup>。しかしその後、彼らに関する記事はいきなり途絶える。再び関連記事が登場したのは1984年、『東亜日報』が卓庚鉉の慰霊碑の建立を計画した日本人・光山稔について報じたものであった<sup>21)</sup>。その間なんと約40年、韓国社会は朝鮮人特攻隊員問題について口を閉ざし続けてきたのである。朝鮮半島では、分断と戦争、東西冷戦の対立の場となって、朝鮮人特攻隊員に対する深い考察も親日清算も行なわれないうまま、南では生き残った特攻隊員と少年飛行兵出身者が韓国空軍で活躍したが、特攻隊員の遺族はお墓どころか、彼ら

の祭祀すら許されない日々が続いた。さらに、長い間韓国では空軍内部を除いてどんな社会的な論議も学術的な研究も進展されないまま彼らの存在は忘却されてきたのである。

その後1990年代中頃から、特攻隊そのものを批判する新聞記事は度々掲載されている<sup>22)</sup>。但し、2004年に日韓首脳会談の場所として予定されていた鹿児島県が、特攻隊の発進基地として軍国主義の色彩が濃いという理由で、韓国政府内部で場所変更が議論された、という内容であり<sup>23)</sup>、「神風」という単語に日本に対する強烈な嫌悪感を滲ませた論調の中では、とても朝鮮人特攻隊員に対する客観的な記事を期待できる状況ではなかった。朝鮮人特攻隊員・朴東勳（日本名・大河正明）の死後、母校に建てられた碑が住民によって破壊された、という報道からでも分かる通り<sup>24)</sup>、特攻隊は「軍国主義の象徴」であるという認識が崩れる気配は一向に見えなかった。

こうして埋もれかけた存在が少しずつ注目を集め始めたのは、1995年の「光復50年」を迎えた以降であり、その先駆けが、同年MBCが特別企画として制作した『アリラン アラリヨ』であった。朝鮮民族の歴史と哀歎を込めた伝統民謡の起源と文化を追跡したこの番組は、彼らを直接的に扱ったプログラムではないものの、出撃する前の最後の夜に「アリラン」を歌った卓庚鉉の話を紹介している。その後、この問題を正面から扱ったのが、1996年8月にCTNが放送した『神風、そして未だに放浪している靈魂』である。この番組では卓庚鉉と金尚弼（日本名・結城尚弼）の2名を中心に、知覧から出撃し死亡した朝鮮人特攻隊員11名の行方を1年に渡り追跡した。

さらに2005年2月には、光復60年の「三・一節」特集として、SBSが番組『それが知りたい』内で「靖国の神になった少年特攻隊員」を制作、靖国神社に合祀されている17歳の少年・朴東勳（日本名・大河正明）を取り上げ、朝鮮人の靖国神社合祀の問題点を指摘している。SBSは2014年2月にも『気に

なる話 Y』で朴東勳を追跡したが、家族へのインタビューを通して、彼の特攻と死は天皇への忠誠心ではなく、幼少期からの飛行機への関心と愛着が生んだ悲劇であると結論付けている。

さらに、KBSが2012年3月に放送した『朝鮮人神風 卓庚鉉のアリラン』では、卓庚鉉がなぜ特攻隊員として沖縄で戦死したのか、なぜ「アリラン」を歌って出撃したのか等を、「知覧平和特攻会館」や「ホテル館」、彼が住んでいた京都での取材を通して明らかにしようと試みている。これまでの多くの番組が植民地時代への告発や戦争末期の軍事政策に関する内容を扱う中、朝鮮人特攻隊員が置かれていた時代的背景や彼らの内面に焦点を絞り、韓国社会に大きな反響をもたらした点は特筆すべきである。

そして、日本社会に遅ればせながら韓国学界が彼らの存在に注目し始めたのも2000年代に入ってからである。背景として、民衆が持続的に要求した政府レベルの過去清算作業がいよいよ東学農民革命から民主化運動にいたるまで幅広く行なわれたことが大きい。また、同時期に小泉元総理大臣の靖国神社参拝などの逆流が起きていた。これらの研究では、これまでタブー視されてきた朝鮮人特攻隊員が置かれた時代背景を分析しながら、彼らの身元の把握や若者の飛行機への憧れ、職業の一環として家族を含めてより良い生活を送るための進路であった「志願」という制度の実情の解明までなされ、その実体に一歩接近した点は非常に意義がある。

さらに2012年には、新聞記者のキルユンヒョンがここまでの研究を踏まえ、朝鮮人特攻隊員問題の概要を初の書籍として纏めた『私は朝鮮人神風だ』を出版した。その中でも特に興味深いのが、特攻隊員に選ばれるも生き残った人々が、解放後韓国空軍の設立・発展の中で重要な地位を占め、その後の朝鮮戦争においても神風特攻隊の戦略や戦法がそのまま踏襲されるなど、韓国社会は朝鮮人特攻隊員の存在を否定しながらも、実際は植民地時代の戦争経験が色濃く残り続けるという歴史のアイロニーを鋭く指摘した点である。

このように戦後韓国社会では、植民地時代の「独立運動」が、韓国社会の公式的な記憶として定着しながら、朝鮮人特攻隊員という事実は日本帝国主義に加担したという理由で抹消された。長い間「神風特攻隊」という言葉は具体的な意味を持たずに、論者の政治・イデオロギー的な立場によって多様な意味付け及び感情移入がなされるものであった。特に朝鮮人特攻隊員の場合、彼らの内面世界を理解する事ができる資料が極めて少なく、彼らに対する分析も進まなかった。彼らは、日本人特攻隊員のような、知覧のホタル館や万世特攻平和祈念館に展示されているような膨大な資料を殆ど残されていないが故、内面を分析し理解する事は非常に難しかった。これは当時の状況から見ると、彼らも日本人特攻隊員と同じく、内面的な感情の口外が許されなかったことを考えれば納得できる問題である。植民地出身という差別に耐え、特攻隊員として死の出撃をするしかない状況が彼らの精神世界に大混乱をもたらしたことは疑いの余地もない。

#### 4. 朝鮮人特攻隊員・卓庚鉉と朝鮮人特攻隊員 に関する日韓社会の認識の違い

##### 4-1. 朝鮮人特攻隊員・卓庚鉉と鳥濱トメ

これまで述べてきた通り「アリラン特攻」卓庚鉉と「特攻おばさん」「特攻の母」という愛称で全国的に有名な「鳥濱トメ」(以下、トメ)との死を直前にして交わした「感動」の物語は、2000年代に入ってから映画『ホタル』や『俺は、君のためにこそ死ににいく』といった映像制作物や多くのメディアで取り上げられてきた。

卓庚鉉は1920年、慶尚南道泗川郡で生まれたが、その後一家は日本に渡り京都市に定住する。1943年には京都薬学専門学校(現 京都薬科大学)を卒業し、「陸軍特別操縦見習士官」(以下、「特操」)に応募し、「特操1期生」に合格した。特操第1期募集が始まった1943年当時、兵役義務がない朝鮮人には当然権利も認められていなかった。日本は1928年に

初めて普通選挙を実施しながらも朝鮮人には選挙権を与えず、徴兵制開始後の1945年4月によく選挙権を与えたが、それでも差別が完全に無くなる事はなかった。こうした状況下で、差別を克服したい朝鮮人の若者は、軍へ入隊し兵役義務を負い、日本人でも難関の操縦士になれば、日本の若者と同じ待遇を受けられると考えたのである。

1943年10月、「特操1期生」となった卓庚鉉は、第5航空軍知覧教育隊に配属され、知覧基地で9か月の基礎訓練を受けていたが、その頃から卓庚鉉はトメの富屋食堂に頻繁に出入りしていた。店の常連として鳥濱一家と深い親交を持つ事となったが、トメの次女・礼子は彼について「朝鮮の人だし、身寄りも少ないだろうからと、母が特別に息子のように可愛がってね。風呂に入れて背中を流してやりながら、心を聞くようにあれこれと話しかけたりしてねえ…。それですっかり家族ようになっていたのよ。」<sup>25)</sup>と回想している。礼子にとっても彼は兄のような存在であった。

終戦後、ひたすら特攻隊員の冥福を祈り続けたトメのひたむきな行動は、徐々に『町報ちらん』や全国メディアに登場することになる。番組はトメが死んでいった特攻隊員について振り返り、さらに彼らの遺族と対面するという企画が多かった。そこでは隊員一人一人との対話やエピソード、出撃前日の事がありのままに語られたが、卓庚鉉について初めて詳しく報道されたのは1980年代に入ってからである。1982年、トメは地域新聞社のインタビューの中で、「ただ一人、いまだに遺族の分からない朝鮮人将校がいる。それだけが心残り」<sup>26)</sup>と語っていた。その後、1983年に毎日新聞が企画した、「83知覧の夏」シリーズ(5回)において、「朝鮮人少尉最後の宴でアリランの歌」という大きな見出しとともに、彼の物語が「最初」の記事として全国に紹介されたのである<sup>27)</sup>。この報道後、卓庚鉉の「アリラン物語」は次々と報道されていく。トメはその後も彼について「一番心に残っている隊員」<sup>28)</sup>であると述べるなど、様々なメディアを通して卓庚鉉に対する想いを積極



的に発信・紹介し続けたことで、彼の物語が日本社会で発見され、朝鮮人特攻隊員の典型的なシンボルになり、その後、日韓メディアが作り出す朝鮮人特攻隊員に対する言説・表象の代表格として取り上げられるようになったのである。

植民地支配された朝鮮人青年が、自らを支配する国のために死を選択した、また、差別を受けた朝鮮人青年を、基地があった町で食堂を営んでいた日本人女性が自分の子どものように世話をし、その青年が出撃の前夜に朝鮮のアリランを歌ったという物語は、日本の都合に合わせた解釈がなされ、「悲劇の主人公」として同情を集めるだけでなく、一部からは「朝鮮人であるのに日本のために命を捧げた人物」と賞賛され、「アリラン特攻」としての物語性が評価された一方で、アリランを歌う以外の彼の心の声は全く聞こえてこなかった。

#### 4-2. 韓国における映画『ホタル』上映と興行失敗

2001年公開された『ホタル』は「特攻の聖地」という知覧のイメージを全国に知らしめる決定打となる作品であった。1967年『あゝ同期の桜』で特攻隊員を演じた高倉健が再び主人公として出演、生き残った特攻隊員を演じたというだけでも、撮影前より映画批評家はもちろん、一般人の多くの関心を集めた作品であり、東映映画社の創設50周年記念作品の一つとして1990年代中盤以降を代表する特攻隊映画である。しかし、『ホタル』が日本の観客に対し以前の特攻映画とは何かが違う、という強烈な印象を残した最も大きな要因は、1945年朝鮮で公開された日朝合作映画『愛と誓い』以降、約60年ぶりに日本のスクリーンに登場した「朝鮮人特攻隊員」の存在そのものであり、しかもその役どころが突然現れる付随的な人物ではなく、主人公・金山少尉として堂々と登場している点である。

『ホタル』もこれまでの作品同様、特攻の当事者の記憶による事実の復元という手法は変わらない一方で、特攻隊への志願が示す意味を日本人ではなく朝鮮人の立場から問題提起をするなど、これまでの

作品とははっきりと一線を画すストーリー形成を持つ点は注目すべきである。降旗監督が「世の中に何かを残したいが残せず死んだ人々の存在を知らしめるために映画を制作した」<sup>29)</sup>という制作目的を明かした事からも分かる通り、「優越な植民支配者と劣等な被植民者」という現在まで続いている人種主義的な構造からの脱却を目論み、危機に置かれている祖国を救うために日本の若者が純粋な熱情を持って特攻に臨んだ、という既存の特攻映画の言説的枠組みを攪乱する可能性をも内包していた。言い換えれば、なぜ植民地の若者達が特攻作戦に動員されるようになったのか、そして、彼らは祖国を奪った日本のために、強制的に命を失うという状況に置かれた時どのような心境だったか、という疑問を投げ掛けるだけでも、この映画は戦後制作された特攻映画の叙事構造を変える作品になり得ていたのかも知れない。

日本では日本映画興行収益9位、国内観客数210万人を記録した『ホタル』であったが、朝鮮人特攻隊員を映画の主題とし日韓両国の悲しい過去を果敢に取り扱った事で、韓国でも上映を前にして多くの人々の関心の対象であった。韓国・安東市で行われたロケの際には、地方新聞を中心として報道が出されており、映画専門雑誌の『CINE21』では、映画撮影および韓国での上映前後の4回に渡って関連記事が掲載された。また、2002年1月には韓国上映を目前にして現地で降旗監督と高倉健の記者会見が行われたが、内容を批判するような質問は特に出ず、それに対し日本のメディアは韓国の人々もこの映画を自然に受け止めたと分析したのである<sup>30)</sup>。

しかし、話題を集めた韓国における『ホタル』上映は興行面で成果を得られず、途中で打ち切りとなってしまった。累積観客数は15,636名、上映した映画館はわずか9か所に過ぎなかった。韓国で「闇の子」として扱われ、忘れ去られた朝鮮人特攻隊員の存在が、『ホタル』を通して突如として登場したが、結果的に韓国国民は朝鮮人特攻隊員の存在そのものを受け入れる所まではいかなかったのである。ただ

し、『ホテル』の韓国上映の失敗は十分予想されたものでもあった。主人公が大日本帝国・天皇のために死ぬわけではなく「朝鮮民族のために」、愛する日本人の恋人を守るために出撃すると語るシーン、朝鮮人特攻隊員の「死」が「朝鮮民族の名誉」として何の疑いもなく堂々と位置付けられている点、植民地支配という歴史の重荷を山岡夫婦の善行を通して一気に「和解」を試みるという終わり方、アリラン特攻の過剰な演出、植民地支配の歴史性に対する認識欠如等、多くの場面で韓国の人々が感じるであろう違和感は決して拭いきれない。さらに主人公が朝鮮人であるが故に受けていた民族的差別、特攻の募集過程における強制性のある暴力と抑圧は全く描かれておらず、祖国と民族の名で朝鮮人特攻隊員の死を崇高で悲壮に演出する様子に、「物足りなくてむなしい」感情が感じられるのもまた事実である。

この映画『ホテル』に対して韓国社会からは「愛が良く感じられる映画」「穏やかな映画」「暖かい感動」「戦争について考えて見るきっかけになった映画」「アリランの歌に涙を流した」といった一部の肯定的意見を除くと、「戦争と軍国主義を美化する映画」「歴史歪曲映画」「韓国の苦痛を分かるか」等といった、戦争と歴史認識に関わる批判が大半を占める。韓国社会によって創られた、彼らに対する「狂気の奴隷」「集団的な発狂」のイメージと、幼少時代より受けてきた反日教育・感情の影響は映画の見方にバイアスをかけ、特攻隊員は日本のために死んだ「対日協力者」であり、民族の「裏切り者」だという認識・見方から脱することは非常に難しい。

「日本では神風の惨状を反省した映画として評価を受けたが、韓国では軍国主義を美化したという批判を受けた。両国民の認識差を実感させた」<sup>31)</sup>映画だったが、これまで長年に渡り韓国社会で忘却されてきた朝鮮人特攻隊員の存在が、『ホテル』を通して韓国の人々の胸の内に少しずつではあるが確実に浮上してきた点は評価できるだろう。

#### 4-3. 卓庚鉉の「帰郷祈念碑」建立と韓国社会の反対

2008年5月10日、日本人女優黒田福美が、卓庚鉉を慰霊するために彼の故郷である韓国慶尚南道泗川市に建てようとした「帰郷祈念碑」の除幕式が(出撃の前日)行われようとしていた。泗川市と、建立までの過程で協力した韓国人(碑の彫刻家、東京大学客員教授など)の強い支持・支援を受け、除幕式も無事に開催されるかに見えたが、除幕式直前、インターネットやマスコミを通じて祈念碑のことを知った地元の人々や関連団体の反対デモによって中止、慰霊碑は撤去された。この除幕式を巡る事件は、戦没者に対する慰霊問題や日韓間の歴史認識の違い、歴史認識による両社会の理解の相違点を明らかにした事件であり、朝鮮人特攻隊員に関する韓国人の意識をまざまざと見せ付ける出来事でもあった。

泗川市議会をはじめ、泗川進歩連合、大韓光復会、民族問題研究所等の左右団体、ネット上の国民まで巻き込んだ、この慰霊碑建立中止を巡る論争の核心は、卓庚鉉の立場をどう解釈するかという点に尽きる。黒田側は彼を歴史の犠牲者とみなしたが、韓国市民団体側は彼を「日本のため戦った者」民族の「恥部」「裏切り者」として切り捨てたのである。さらには、彼ら朝鮮人特攻隊員は「志願」して皇軍として「天皇のために死んだ人」であり、靖国神社に合祀されているとし、この問題を日本政府の歴史認識と歴史歪曲問題、過去史の謝罪問題とまで連携させ断固反対している。韓国における朝鮮人特攻隊員は、植民地支配や歴史認識、靖国問題、戦後補償など、当時から現在に続く日韓関係の歴史的脈絡の中で考えなくてはならない存在と一方的にみなし、これまで作られた特攻隊員に対する先入観のまま卓庚鉉を「断罪」しているのである。

卓庚鉉の慰霊碑をめぐるハプニングは日韓の歴史認識の相違点、亡くなった人々に対する哀悼の権利、すなわち、その権利は誰に属して行使すべきか、という問題、また未だ続いている記憶闘争の様相を理解する上でもいくつかの重要な示唆点を提起してい

る。もちろん、現在では植民地時代に日本によって強制的に動員・犠牲にされた人々に対する慰霊はある程度は進められている。しかし1999年、慶尚北道英陽郡で強制徴用・徴集の被害者たちの霊を慰めるために建てられた「恨の碑」の建立過程を巡って地域社会の論難になった事例もある通り、強制連行の末、犠牲になった人々に対する慰霊の場合ですら、決して順調とはいかなかった。ことさら特攻隊員の場合は、少なくとも「志願」という枠組で行われ、天皇のために自殺攻撃を敢行した狂信主義者という認識がある点で、彼らを戦争の被害者として慰霊するのに一層難しい現実もあるのである。

しかし「帰郷祈念碑」の除幕式をめぐる住民達と関連団体の反対デモによる中止、慰霊碑は撤去など一連の問題から見え隠れする、韓国社会の未成熟で感情的な態度は依然大きな問題として残っている。「神風特攻隊員は絶対に許せない」、「慰霊碑を破壊すべきだ」、「このような慰霊碑が我が地方に建てられて恥ずかしい」といった過去に対する極端な感情の表出、除幕式が合法的な手続きではなく、実力行使によって阻止されたことは、今後韓国国内において朝鮮人特攻隊員の問題を論議する機会・空間まで消滅させてしまったのである。

### 終わりに

これまで韓国社会は、朝鮮人特攻隊員に対して日本が戦時動員のため作った「神翼」のイメージから大きく脱することができないまま、植民地解放後は彼らの存在を長年「忘却」「拒否・否定」してきた。韓国内で神風特攻隊が新聞記事として登場したのは1980年代以降であるが、2000年代に入り、ようやく彼らに対する研究が出されるようになった。韓国においては、分断と戦争、東西冷戦の対立、高度成長、民主化の経験をしながら、長い間朝鮮人特攻隊員に対するいかなる深い考察や社会的な論議、学術的な研究はなされなかったが、民主化の進展によって、太平洋戦争軍人は日本の戦争による犠牲者であると

徐々に位置づけられるようになった。2004年「日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会」と「日帝強占下強制動員被害真相糾明法」が成立したが、この法律は日本の戦争に動員された韓国人被害者を特定し、名誉を回復させ、補償への道を開こうとするものであり、2005年5月に「親日反民族行為真相糾明委員会」、2008年「太平洋戦争戦後国外強制動員犠牲者支援委員会」なども発足され、多様で積極的な過去清算を政府と市民が具体的に深く論議できるようになったのである。ただし、特攻戦死者に関しては、卓庚鉉の慰霊碑問題からも分かるように、その社会的評価は従前の評価と大きな変化は見られず、いまもなお「日本の戦争に積極的に協力した対日協力者＝親日派」と見なされている。

しかし、本当に少しずつではあるものの世論の変化も見受けられる。民族問題研究所が2009年発行した「親日人名事典」の中で、親日活動に関わった人物として4776名が登録されたが、その中で卓庚鉉に対しては、加害者としての立場と被害者としての立場の両方を認めている。さらに、他の朝鮮人特攻隊員に関しては評価・判定を保留しているのである。長らく植民地問題に取り組んできた同研究所においても、特攻隊員であったことだけを理由に反民族行為とはみなさないことは明らかであり、韓国政府は特攻死した朴東薫に対して遺族たちが提出した「強制動員被害」を認めているのである。研究やメディア内でも朝鮮人特攻隊員の人生を緻密に追跡するなど、彼らの位置付けを総合的に判断し、客観的に捉え直す動きは確実に見られる。

現在韓国社会で要求されているのは、当時戦場で様々な理由で死を迎えるしかなかった彼らの経験の実態と、彼らが特攻の道を選ぶしかなかった状況を総合的に理解・把握する事である。さらに、一体何人の朝鮮人が特攻隊員になり、どのような戦死を遂げたのか、生き残った朝鮮人特攻隊員はその後をどう生きたのか、という歴史の真実をもっと総合的・客観的に把握する必要があるだろう。これは、「特攻隊＝反民族行為」を当然のものとして受け入れる

韓国社会においてその誤った認識を乗り越える上で最も優先的な課題である。朝鮮人特攻隊員に対する既存の皮相的理解が持続したままでは、戦死した朝鮮人特攻隊員は無条件に反民族行為者となり、生き残った朝鮮人特攻隊員は大韓民国の空軍の高位官僚及び韓国戦争の英雄として記憶される、「歴史のアイロニー」を永遠に抱え込んで行くかも知れない。隊員1人1人の心の深淵まで耳を澄まさないで、真の意味の理解には到達できない。彼らの魂は依然として、軍神として賞賛された日本でも、祖国である韓国でも受け入れられずに、日韓の失われた歴史の空白の狭間でひたすら漂流している。

本稿は 拙稿「朝鮮人特攻隊員のイメージの変容—韓国における「特攻」の受け入れがたさ」福間良明・山口誠編 『「知覧」の誕生—特攻の記憶はいかに創られてきたのか』柏書房、2015年、241-282頁を大幅に加筆・修正したものである。

## 注

- 1) 拙稿「戦時下植民地朝鮮における身体管理と規律化に関する一考察」有賀郁敏・山下高行編『現代スポーツ論の射程—歴史・理論・科学』文理閣、2011年、68-73頁。宮田節子『朝鮮民衆と皇民化政策』未来社、1985年、52頁。
- 2) 朝鮮総督府の航空政策の展開については、裴始美・野木香里「朝鮮人特攻隊員をどう考えるか」『歴史地理教育』No.733、2008年、24-25頁を参照
- 3) キルユンヒョン『私は朝鮮人神風だ』西海文集、2012年、89頁、94頁、99-101頁、120頁。[韓国語]
- 4) 特攻隊の全戦死者数4,160名のうち20歳以下の若者の占める割合は陸軍で23.5%、海軍で43%に及んだ。吉田裕「戦争と特攻隊—いま、問われているもの」『歴史地理教育』No.733、2008年、14頁
- 5) 『朝日新聞』1944年10月29日
- 6) 『毎日新聞』1944年11月12日
- 7) 「二機で戦艦一撃沈 四機、四艦船を撃摧」『毎日新聞』1944年12月1日、1頁。「轟然、巨艦群覆滅 紅顔・松井伍長な等偉功」『毎日新聞』1944年12月2日、1頁。なお、『毎日新聞』は1904年7月18日に、新朝鮮性向のイギリス人によって創刊された民族誌であったが、その後朝鮮総督府に売却され、36年間、日本の植民地下で朝鮮総督府の施策を伝える役割をした。総督府機関紙という限界にも関わらず、『毎日新聞』の史料的价值はとても高い。それは1940年8月に『朝鮮日報』『東亜日報』が廃刊されてから、解放に至る5年の間朝鮮で発行された唯一のハングル新聞だからである。
- 8) 『京城新聞』1944年12月1日
- 9) 「松井伍長頌歌」『毎日新聞』1944年12月9日、2面
- 10) 『毎日新聞』は「松井伍長を従う」という社説で、朝鮮人特攻隊員の「死」を大々的に報道した。特に、朝鮮の詩人たちは、日本陸軍特別攻撃隊の一員として戦士した印在雄を賛美した「神翼—松井伍長霊前」を発表したのである。『毎日新聞』1944年12月6日と「松井伍長頌歌」『毎日新聞』1944年12月9日
- 11) 『毎日新聞』1945年2月15日、2面
- 12) 裴始美「朝鮮人特攻隊員を考える」『わたつみのこえ』132号、2010年、25頁。裴始美・野木香里「朝鮮人特攻隊員をどう考えるか」26-27頁
- 13) 韓国は世界でも類を見ないほど表彰制度の多い国であるが、特に三一節と光復節に、抗日運動や独立運動で犠牲となった人々に対し建国勲章授与や大統領表彰を行う等、数々の表彰制度の乱用も見逃せない。
- 14) 韓国国家報勲処顕忠施設統合情報 ホームページ <http://narasarang.mpva.go.kr/hyunchung/intro/index.html>。  
韓国統計庁 e-国指標 <http://www.index.go.kr/>
- 15) 歴史教科書においては、日本側は植民地支配に関する記述に反省の意を込める配慮と教育機会の増大、一方韓国側には反日を増長しない冷静な記述を心がける必要性があるといえ、両国においては植民地における民衆レベルでの友愛関係の事実を内容に盛り込み、友好関係を増進する努力が必要である。
- 16) 恐怖の体験展示、すなわち、拷問されている場面の展示と体験できる展示物は幼い子供たちの心

- の中に憎しみと恐怖を持たせ、日本に対する敵愾心を抱かせる。日本は加害者であり、韓国は被害者、つまり日本が悪くて韓国は善という二分法的な敵愾心と弾圧の記憶を乗り越え、人権の次元での矯正施設として刑務所を見直ししなければならない。すなわち、日本に対する憎悪感と分断や、独裁政権からの弾圧だけを記憶するためだけの空間ではなく、「和解の空間」として平和と人権を記憶し、教育させる場所へと生まれ変わることが望まれている。さらに、過剰な民族主義による極端な加害と被害の二分法はさらなる別の問題をも生み出すと考えられる。
- 17) 飯尾が彼に注目したきっかけは、陸軍士官学校56期の生存者が同期の戦死者を追悼するために作成した文集『礎』の中に、戦死した崔貞根（高山昇）が生前、「俺は天皇陛下のために死ぬというようなことはできぬ」と語っていたとの記述を見つけ、衝撃を受けたことによる。天皇のために命を捧げるのが当然とされていた時代に、それも「天皇の楯」になるようにと教育されていた、エリートとしての士官学校出身者が、なぜこのような“恐ろしい”ことを言ったのか。飯尾はこの本において「天皇のために死ぬことはできぬ」という言葉を出発点とし、「突入」という結末を到達点として、その隙間の解明を試みた。
- 18) このドキュメンタリーは、芸術作品賞、日本民間放送連盟賞（第33回報道番組部門最優秀）、ギャラクシー賞（第23回奨励賞）、放送文化基金賞（第12回ドキュメンタリー番組部分奨励賞）等を軒並み受賞するなど、高い作品性が認められた。
- 19) 代表的な研究としては、裴始美・野木香里「特攻隊員とされた朝鮮人」『季刊 戦争責任研究』第56号、2007年。同「聞き書き—陸軍少年飛行兵から特攻隊員になった朝鮮人」『在日朝鮮人史研究』No.37、2007年。裴始美「朝鮮人特攻隊員を考える」『わだつみのこえ』132号、2010年7月等がある。
- 20) 『東亜日報』1946年1月10日、2面。「帝国主義日本の浅薄な宣伝政策がいかに憎らしいか」『ソウル新聞』1946年1月10日。しかし後の調査で誤報と判明している。[韓国語]
- 21) 『東亜日報』1984年9月20日、2面。[韓国語]
- 22) 例えば、「帝国日本の妄想により麗しい若者が犠牲に」『京響新聞』1994年10月20日、7面。「韓国人神風特攻隊員11名の位牌を送還」『ハンギョレ新聞』1995年2月18日、18面。「文学で会う歴史（10）徐廷柱の親日詩」『ハンギョレ新聞』1996年3月27日、14面など。[韓国語]
- 23) 『連合ニュース』2004年11月3日 [韓国語]
- 24) 『朝日新聞』1990年9月9日
- 25) 佐藤早苗『特攻の町 知覧』2007年、光人社、42-45頁
- 26) 「朝鮮人特攻兵安らかに—最後の遺族捜し“知覧の母”」『西日本新聞』1982年8月15日
- 27) 「83知覧の夏1 朝鮮人少尉最後の宴でアリランの歌」『毎日新聞』1983年6月11日
- 28) 『南日本新聞』1984年4月27日
- 29) 『CINE21』2001年3月13日 [韓国語]
- 30) 『朝日新聞』2001年5月12日、夕刊、10面
- 31) 『韓国日報』2004年11月7日

#### 参考文献

- 朝日新聞西部本社編『出撃・知覧飛行場 空のかなたに 特攻おばさんの回想』葦書房、2001年
- 赤羽礼子 石井宏『ホタル帰る』草思社文庫、2011年
- 瀬戸口幸一（1993年3月）“土地強制収用と特攻機の墜落”『知覧文化』、249-250頁
- 高木俊朗『知覧』朝日新聞社、1965年
- 高木俊朗『特攻基地知覧』文庫版・改版、角川文庫、1973年
- 高木俊朗『特攻基地知覧』（改版）、角川文庫、1995年
- 高木俊朗『陸軍特別攻撃隊』文芸春秋、1983年
- 高岡修編『新編 知覧特別攻撃隊』ジャブラン、2010年
- 佐藤早苗『特攻の町 知覧』光人社、2007年、42-45頁
- 永井優子「君忘れじ 鹿兒島の特攻基地をゆく」『正論』、2014年2月、179-180頁
- 苗村七郎編著『陸軍最後の特攻基地』東方出版、1993年
- 清武英利『「同期の桜」は唄わせない』ワック出版、2013年
- 知覧町郷土誌編纂委員会編『知覧町郷土誌』知覧町、1982年
- 知覧町立図書館『知覧文化』創刊号、1964年、66-67頁
- 知覧町立図書館『知覧文化』第3号、1966年、67-70頁

知覧町立図書館『知覧文化』第8号, 1971年, 62-63頁

知覧特攻平和会館『魂魄の記録 旧陸軍特別攻撃隊

知覧基地』(知覧特攻慰霊顕彰会・知覧特攻平和  
会館管理組合, 2004年

福間良明『殉国と反逆 「特攻」の語りの戦後史』青弓  
社, 2007年

福間良明『「戦争体験」の戦後史—世代・教養・イデ  
オロジー』中公新書, 2009年

裴始美・野木香里「朝鮮人特攻隊員をどう考えるか」

『歴史地理教育』No.733, 2008年, 24-25頁

裴始美・野木香里「特攻隊員とされた朝鮮人」『季  
刊 戦争責任研究』第56号, 2007年

裴始美・野木香里「聞き書き—陸軍少年飛行兵から特  
攻隊員になった朝鮮人」『在日朝鮮人史研究』  
No.37, 2007年

宮田節子『朝鮮民衆と皇民化政策』未来社, 1985年,  
52頁

吉田裕「戦争と特攻隊—いま問われているもの」『歴  
史地理教育』No.733, 2008年, 14-15頁

## Changes in Perception of Korean Commandos in Korea

KWON Hak Jun <sup>i</sup>

**Abstract** : The purpose of this report is to investigate how perceptions towards Korean commandos have changed from the 1940s to the present day. Under Japan's administration of Korea, Korean commandos were once worshiped as gods. But they have since been considered a stain on history. They have largely been deleted from the annals of history since Korea's liberation from Japan's colonial rule. The images of Korean commandos surfaced in a movie [*Hotaru*] and were again highlighted due to the memorial monument problem, but the underlying issues remain unsettled to date. Public opinion of commandos who died during the war is still negative, and there still has been no big change up until now. But as a result of the effects of democratization and reevaluation of the past, public opinion has begun to change. There is a need to reassess the Korean commandos in general in order to objectively reconsider the matter.

**Keywords** : Korean commandos, *Hotaru*, oblivion, consciousness, memorial monument

---

<sup>i</sup> Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University